

ヴァルドルフ音楽教育の基底をなすもの

——『人間における音の体験』をめぐって——

大久保佐知子*

Sachiko OKUBO

Die Grundlage der Musikerziehung der Waldorfpädagogik

I 問題提起

すぐれた教育理論なくしてすぐれた教育実践はあり得ない。どのような名人芸にみえる教育実践であっても、そこには確固とした教育理念、教育方法上の原理が必ず存在する。本稿でとりあげようとする自由ヴァルドルフ学校 (Freie Waldorfschule) の教育は、個々の教師がすぐれた芸術性、創造性を発揮しながらも、根底に共通の人間認識と教育方法上の原理を備えた実に力強い教育理論、実践である。1919年設立以来のこの学校の歴史をみると、途中ナチスによる閉鎖という壊滅的打撃を受けたにもかかわらず、戦後再生し、政治的、経済的その他の困難をもくぐりぬけてとりわけ1960年代から1970年代にかけて学校数の上でも飛躍的な発展を遂げてきた。この発展が日本と経済的な基盤での共通点の多い先進的な資本主義工業国でとりわけ著しい¹⁾ ことをみれば、今世紀初頭に設立されたこの私立学校の現代的な意義は、失われるどころか益々増大していることを確信することができるだろう。

この学校に集まる関心や賛同の中心は、総合学校 (Gesamtschule) のモデルに合致したものだという点にある。更に音楽教育を研究する立場からみれば、「学校オーケストラのできばえを聴いていると、多くの子が一応のコンサートをこなせるぐらいにまでは、上達するようだ。」²⁾ と評されるように、この学校の音楽教育の成果は総合学校におけるものとしては特別に際立ったものがある。そしてこの成果を保証しているのはとりもなおさずこの学校の思想的な根底にある総合的な人間形成の見通し、即ち一般人間学であるとともに、それと不可分に結びついた音楽教育の理論である。本稿は、この学校の教育理論における人間観と音楽観の固有の結びつきについ

て明らかにしようとするものである。

この自由ヴァルドルフ学校は、1919年、哲学者ルドルフ・シュタイナー (Steiner, R, 1861～1925) の教育上の創見を支柱として設立された。従ってその教育原理、方法を考察しようとするならば、この学校の理論的思想的な根底にあるシュタイナーの世界観——アントロポゾフィー (Anthroposophy——人智学と訳されることもある) に至らざるを得ない。しかしながら、このアントロポゾフィーをいわゆる研究の俎上にのせるにはいくつかの困難があることを指摘しなければならない。

アントロポゾフィーが現代的な“科学”の概念に馴じみにくい理由の一つは、シュタイナーが、五官を通じて見聞し、確認し、測定し得る感覚的世界の他にいわゆる“超感覚的世界” (Übersinnliche Welt) の存在を自明のこととしている点である。しかもこのことこそがシュタイナーの哲学の中核をなす思想である。人間は、明晰で圧倒的な思考をとおして、認識の限界だと思こまされているものをつき破り、五感で知覚できるものの彼方に進むことができるのである。彼によれば、超感覚的現実と感覚的現実とは同一の存在性の二側面なのである³⁾。それ故に感覚を十分に開いて物質的な現実世界を観察するならば、その背後にある超感覚的な存在を認識することは誰にでも可能なのである。

このような立場から、彼は広くは宇宙観から日常生活のこまやかな事柄に到るまで独特の認識を提起した。本稿にかかわる人間観、音楽観もその一連のものである。それは極めて直観的で透徹した見方であり、それ故に一方では概念的思考や因果律を拒否するものでもある。この意味で、これから考察しようとするシュタイナーの人間観、音楽観が、物質性に土台を置く現代の思考方法と馴じみにくいことは事実である。にもかかわらずその構想は極めて具体的、実践的であり、決してエソテリックなものではない。現実の教育を進めていく上での力とな

* 島根大学教育学部音楽研究室

り得る方法そのものの示唆に富んでいるということができよう。

さて、本稿で考察しようとする“Das Tonerlebnis im Menschen”（人間における音の体験）は、シュタイナーをはじめとする多くの人々の尽力によって最初のヴァルドルフ学校が設立され、その四年後の1923年、シュタイナーが教師たちにむけて、音楽の授業について行なった二夜連続の講演である。これはシュタイナーがヴァルドルフ学校の音楽教育に関して行なったほとんど唯一の講演である、という点で極めて基礎的、原則的な内容を含んでいると同時に、学校設立以来四年を経て、一学年から四学年までの生徒が揃った段階⁴⁾、設立と同時に入学した生徒が四年生になり、ヴァルドルフ教育で重視される“九才の危機”⁵⁾に相当する年令に達した時期ということもあり、九才前後の、音程や音楽の諸要素の教育が具体的に述べられているという点でも興味深いものである。本稿ではこの講演におけるシュタイナー自身のことを吟味しながら、彼の間人観と音楽観が、“音楽の教育”という実践的課題の中でどのようなかたちで固有に結びあわされているか、を中心に考察していきたい。論述の際に彼の間人観、音楽観にかかわる他の原典、とりわけ“Aus der Akasha-Chronik”⁶⁾“Theosophie”⁷⁾などにもふれることになる。

II 人間と音楽に関する史的認識

音楽教育という実践的な課題に直面したとき、音楽の起源、及びその将来という時間的な連続性の中での一断面、一過程として、現代の音楽現象を理解しようとすることは、極めて原則的な把握の仕方であろう。現代の美学は音楽史に関して、歴史的資料の考察や比較音楽学の方法によって様々な解釈を行ってきた。しかしながらシュタイナーの音楽観は、いわゆる超感覚的な認識にもとづく史観を土台としている点で、他の音楽史観とは極めて異質な様相を呈している。ここではとくに音程に関するシュタイナーの史観を考察したい。

シュタイナーは歴史の進行を壮大なスケールで展望している。彼によれば音楽史における現代は15、6世紀以来の、カデンツ（終止）の発見とそれに伴って三度音程が人間にとってとりわけ切実なものとなった、そういう時代に継続するものとして把握されている。それ以前のおよそ二千年間の時代（ギリシァ＝ラテン期）の人間にとっては、五度音程が特に切実な響きを持っていた。そして更に時代を遡り、意識の論理的構成が未発達で人間

がまだ神話的思考形態を持っていた時代には七度音程が最も切実なものであった。すなわち音楽の体験は七度、五度、三度というように歴史的に変化してきたのである⁸⁾。

この変容の進行は、彼の宇宙観を述べた「アカシヤ年代記より」(Aus der Akasha-Chronik)の脈絡である精神性の喪失、物質化の進行としての歴史観により解説される。すなわち彼によれば太古の神話的意識状態をもった人間にとって七度音程はとりわけ痛切に響いたのである。なぜなら七度の体験は人間を地上的存在としての束縛から解放されたと感じさせることは、いわば脱魂状態ともいべきものを可能にしたのである。当時の人間にとって「音楽を体験する」ということは即ち「私は精神界にいる」ということでもあった⁹⁾。物質化の歴史の進行にしたがって人間は自己の肉体を占有したいと思うようになった。それと共に七度音程は人間にほんのわずかながらも痛みを感じた感覚をもたらしようになったのである。同時に人間は五度音程に大きな満悦を感じるようになる。しかし五度の時代もまだ主観的個人的な感情が音楽に結びつけられることはほとんどなかった。五度の喜ばしい気分は個人的、主観的な感情というよりも客観的なものの中におきかえられたものだったのである。それはたとえば「私の中で天使が音楽をはじめた」とか「ミュージックが私の中で語る」というような感覚であった¹⁰⁾。音楽が主観的な感情と結合されることが可能になったのは三度の体験が優勢を占めるようになってからである。三度の体験、それは五度の中に長三度、短三度をともなった長調、短調の体験である。現代のわれわれにとってそれは個人の主観や感情のニュアンスを表現する最も基本的な響きである。しかしその中に三度を伴わない五度音程は、空虚五度という表現があるように現代人にとってはなにかしら空しいものとして響くのである。かつてのギリシァ＝ラテン期の人間にとって五度は内的なイマジナツィオンを喚起する力を持っていた¹¹⁾。現代においてはそうした力を失ったかわりに、主観的な喜びや悲しみを音楽からうけとる方向に人間の意識が進化してきたともいえる。三度音程によって、音楽体験の性格は精神世界の表現から主観的な感情表現に変容したのである。

シュタイナーは現代をこの三度の音楽的感覚の深化の途上にある時代として捉えている。そして次にくる時代はかつて人間が失ったもの——すなわち精神世界とそこにおける神的なもの——を再び見出すべき時代である。そこでは音楽体験は更に二度、一度と深化し、単一の音をも内的体験のゆたかさや多様性によって一つのメロディーのように体験することができるようになるので

あろう¹²⁾、と彼は述べるのである。

さて、音組織の発展という観点からみれば、教会旋法から調性へと進行してきた西洋音楽の歴史は、五度音程から三度音程への感覚の変容というシュタイナーの描く脈絡と大筋において一致している。調性の確立は近代的合理主義と個人の尊厳の認識にむかう近代ヨーロッパの精神性と無関係ではないであろう。それ故に、シュタイナーの描いてみせたヴィジョンは、五度を基調とするそれまでの旋法から調性への発展を精神性の側面から意義づけたものとみることはいかなるわけでもないであろう。

いずれにせよこのような史的認識によって、“以前の文化期に遡る”¹³⁾ というヴァルドルフ教育の教授の原則が音楽教育の面で具体化される。それはすなわち九才、十才の時期——主観が芽ばえ外界に対する懐疑の念によって生じる発達上の危機としてヴァルドルフ教育ではとりわけ重視される時期——までに十全に五度の体験をくぐらせ、三度の体験はこの時期に至ってはじめて真に理解させる¹⁴⁾、というものである。この原則にもとづく教育によって、ヴァルドルフ学校の子どもは長調、短調を、好感と反感によって痛切に感情移入しながら自らの発達の重要な節目の時期を通過する。そして、シュタイナーの描く壮大な精神史としての音楽史を体験できる教師こそが、子どもの感情の発達を内包した三度の体験を、劇的に、芸術的につくりだすことができるといえる。

Ⅲ 人間と音楽に関する構造的認識

人間と音楽に関する構造的認識は、前述の史的認識の動的な把握に対して、静的な面からの把握ともいえるであろう。人間をいくつかの本質からなる構成体としてみるシュタイナーの人間観は伝統的な哲学や心理学に依拠しつつも極めて独創的な見方を提起している。彼の人間学の諸要素の中からここでは音楽体験との連関において把握されている二つの見方について考察する。

人間三層構造説と音楽の三要素

シュタイナーは様々な角度から人間の総体を構築しようと試みたが、その人間学の基本は人間の全体的構造を肉体と魂と精神からなるものとする伝統的な考え方にとっている¹⁵⁾。そこから更に実践的な立場からの人間観として彼は人間構造の三層性についての考え方を提起した。

彼は表象(思考)、感情、意志、いわゆる知、情、意

という三つの基本的な心意活動から出発し、その動きの根底となる物質的、肉体的基盤を考察した¹⁶⁾。それによれば“表象”に対応する肉体的な活動は神経・感覚の領域である。たとえば頭部に位置する脳、知覚器官、そして皮膚がその器官にあたる。これに対して“意志”の作用の基盤は物質代謝と再生産すなわち生殖の領域に属する。内臓器官をはじめ筋肉、血液などいわゆる新陳代謝、四肢組織が、“意志”作用の肉体的表現なのである。“表象”を営む神経、感覚領域の器官は意識の明瞭な覚醒状態で活動するのに対して“意志”に関係する肉体的諸現象は通常無意識的に働いているものである。肉体における上部と下部とを象徴するこれら二つの極の間に中間領域としての胸部器官がある。この領域を代表する器官は心臓と肺であり、またその両者を連結し肉体全体に脈動を与える血液循環組織である。この器官の活動は上部と下部の間に平衡をもたらす規則的な反復運動であり、それ故リズム組織ともよばれる。この組織に依拠するものが感情作用なのである。

シュタイナーは、音楽は全人間によって体験されるということを取りかえし強調している¹⁷⁾。全人間とはとりもなおさずこの三層構造の人間である。音楽体験にはその中でもとりわけ神経組織、リズム組織、四肢組織が関与している。すなわち彼によれば音楽はまず耳によって捉えられる。しかし耳は通常の知覚という“感覚”の役割を音楽体験の場合には果たさない。耳は音楽の知覚においては“空気”の要素を分離し、人間の内部に反響させるための器械というべきものなのである。このような意味での“耳”を通過した音楽は、胸部のリズム組織によってうけとめられ「人間の内部で生きている音と反響」¹⁸⁾しあう。すなわちそれは徹頭徹尾感情体験なのである。そこから更に四肢組織において音楽は舞踏的なものに移行する。別の面からいえば音楽の本質は神経・感覚に打ちつける音と音との間にあって人間の感情を彩色し、四肢の動きにむかわせる何ものかなのである。

このように音楽体験は具体的に三層構造全体にかかわる、すなわち全人間による体験なのである。

さて、このような全人間をもって音楽の本質に対したとき、音楽は何よりもまず感情に働きかけるものであることは疑いない。とりわけ今日音楽的なものの中心であるハーモニーは直接に人間の感情に作用を及ぼすものである。しかし、絶え間なく変容するメロディーの上昇と下降を知覚するのはむしろ神経・感覚組織である。それ故にメロディーの体験は表象作用により近い感情体験であるといえることができる。一方リズムは呼吸と心拍との間にある関係、——おおよそ1対4の割合である——

基づいて体験される。それは血液循環の波にのって四肢の中におくりこまれ四肢組織の中で意志として表現される。リズムはいわば意志への傾向を持つ感情体験である¹⁹⁾。

シュタイナーはこのように人間の三層構造と音楽の三要素を関連づけた固有の見方を提起した。そしてこのような見方から音楽の三要素に関して次のような教授上の原則がひきだされる。即ち本来より内的なものであるハーモニーの理解よりも、メロディーの理解の方が子どもにとってたやすいものである。子どもは既に音に親しむことができるが、ハーモニーの要素の理解は内的な感情の育ちはじめる九才、十才頃にはじめて可能になる、というのである²⁰⁾。このことは結果的には学習可能性から考慮されるメロディー・ハーモニーの学習についての一般的な理解と同様である。しかしリズムに関する彼の提言は独特のものである。

彼によれば、子どもはある一定の内的なリズムを既にごく幼いときに理解する。しかしこのように本能的に体験するリズムを別として、子どもに器楽的な音楽によるリズムを与えるのは九才以後にすべきである²¹⁾、と述べるのである。それは何故か。学校設立の際の教師たちへの講演の中で彼はこう述べている。音楽におけるリズムの要素、「それは独立した生命をいとむ意志の要素です。その生命のいとみは、奇妙に聞こえるかも知れませんが、あまりにも激しい、めくるめくような生命のいとみであり、そのため意識が容易に曇らされてしまうのです。子どもの発達は、この強烈な音楽的要素によって、容易に一種の麻痺状態、無感覚状態の中に陥ってしまいます。」それ故に「音楽的な要素の中できわめて生きいきと働いているものは、一度その力を弱められねばなりません。」²²⁾これが音楽教育の際に必要な感覚なのである。

彼は単なる学習可能性の側面から教授すべき内容を抜き出すことはせず、一貫して精神性の側からの考察と、心意的な働き（表象—感情—意志）の調和的、統合的育成をすすめる立場から、生活年令に従った教育内容を導きだそうとした。「音楽的なものにおいては、生活年令から何をなすべきかを読み取ることが可能なのです。私たちのヴァルドルフ学校の教育と教授法の中には既に見出したのと同じ生活段階がみてとれるでしょう。」²³⁾このように彼は、内的考察によって発達段階にふさわしい教育課題と内容を定めたことを述べている。

四つの構成体と音階

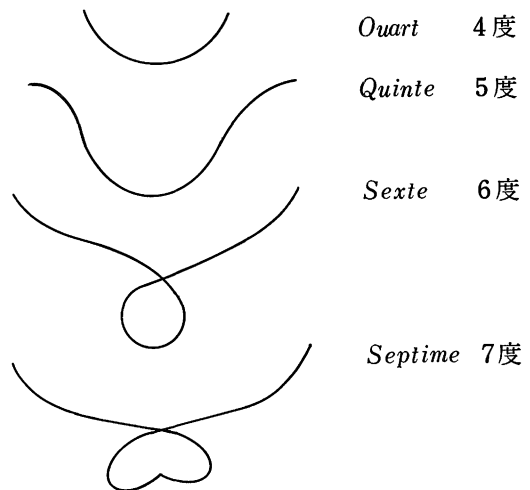
シュタイナーが三つの心意機能とその物質的基盤の連関を、人間の三層構造説として提起したことは既に述べた。別の観点、すなわち人間の発達という動的観点も加味して彼は地上的存在としての人間を四つの構成部分の総体としてみる見方を提起している。

四つの構成部分とは、彼の名づけるところによれば、肉体（自然領界における鉱物界になぞらえられる部分）、エーテル体、又は生命体（自然領界における植物界になぞらえられる部分）アストラル体又は感情体（自然領界における動物界になぞらえられる部分）自我（人間に固有の本質）である²⁴⁾。

彼によれば西洋音楽の音組織を構成する基音から一オクターブ上の音にむかって音階を進むことは、この人間の四つの構成部分がかたちづくっているヒエラルキーを上昇することになぞらえられるのである²⁵⁾。

しかし dis までの音、すなわち基音から三度の直前までの音は本来四肢組織の中にあるもの、つまり最も肉体的なものの中にあるものと結びつこうとする。e から g までの音、すなわち三度から五度までの音は主としてエーテル体とかかわっている。そこから更に上はアストラル体の中で生きているものが作用する領域、より心意的魂的なものの領域である。そして七度からオクターブにむかっては外なる自我、精神的な存在としての高次の自我体験につながっていく²⁶⁾。

シュタイナーは音階のヒエラルキーの体験を次のよう



R. Steiner
Das Tonerlebnis im Menschen
 Dornach 1981 S144 より

に描いている。すなわち一度（基音）は地上的存在としての自己自身である。三度の体験の際の気分は内面の強化、内なる自我を知覚する、というものであり、四度の体験は外界と内面の境界にあって「自らを神の下にいる」と感じる体験である。五度の体験においては神的世界秩序に向かって魂が一步を踏みだすのである。この五度、更に六度、七度の体験は、超感覚的な認識への道である思考 (Imagination)、靈感 (Inspiration)、直感 (Intuition) にそれぞれ相当する²⁸⁾。

シュタイナーによればこのように魂の体験として音階、音程を把握することによって、そこに魂の動きのフォルムが生じる。この動きは人間の形姿によってオイリュトミー (Eurythmie) されることによってハーモニーのリズムを通じての意志表現を十分展開することになる。そのことによって音楽体験は一層深化するのである²⁹⁾。

シュタイナーがくりかえし述べているように、オクターブの中で人間は二度自我 (das Ich) を見いだすことができる。基音すなわち一度は肉体的な内なる自我である。そして八度、すなわちオクターブは精神的な外なる自我なのである。このようなオクターブの体験は今日未だ人は手に入れていない。そして未来のオクターブの体験こそは、「人が音階を（精神界と物質界の）両方の世界に存在するものとして自己自身を知覚するということに導く」³⁰⁾ であろうと述べるのである。このオクターブの内的体験は今日人間が音楽作品の中で体験できるもの——主観的、感情的な体験——ばかりでなく、音楽作品への傾聴の中で全く別の人間になる、という体験に人間を到らしめるはずである。

音楽はシュタイナーにとって世界における神的存在の存在を証明する芸術であり、物質化（固化）の一途を辿ることによって喪失した高次の精神を再び取り戻すための修業でもある。ヴァルドルフ学校の音楽教育の課題は正にこの点にあることは明らかである。

IV 結 び

本稿ではヴァルドルフ学校の音楽教育の最も根底にあるシュタイナーの音楽観、人間観を考察し、その動的側面＝史的認識の側面と、静的側面＝構造的認識の側面からの再構成を試みてきた。シュタイナーの哲学、アントロポゾフィーは、因果律やまた概念的思考とはかけはなれたところに位置しているために、極めて研究の俎上にはのせにくいものと見られる場合が多い。しかし概念化された教育理論や形になった教授法だけを切り離してし

まうとその示唆の意味は激減してしまう。教師個人個人が創造的な芸術家であることを要求されているこの教育体系を真に意義づけようとするならば、その根底にあるアントロポゾフィーに至らざるを得ないのである。

“Das Tonerlebnis im Menschen” はヴァルドルフ学校の当時の教師たちにむけて、その教育実践を支え発展させるために行われた講演である。しかしながら具体的な教授法や教育課程にも触れられてはいるもののそこに描かれているのは神話的な時代よりも更に遡った太古の時代から遙かな未来までを展望した壮大な宇宙の音楽史のヴィジョンであり、また極めて神秘的な観点からみた人間と音楽の姿である。その際立って異質な叙述の中に一貫しているのは、音楽を、学問の対象としての概念的対象としてでもなく、また単なる享楽としてでもなく、一つの精神存在として捉えようとする視点である。

ヴァルドルフ学校の教師たちに要求されるのは、シュタイナーが直観的な透徹した思考によって描いてみせたこのような音楽像を鵜のみにすることではなく、シュタイナーの壮大な提起を手がかりとしながらも、自ら音楽を一つの精神存在として把握し、体現しようとする絶えざる自己修練であろう。このことを本稿における一応の結論としたい。

“Das Tonerlebnis im Menschen” におけるシュタイナーの提起に関して本稿で触れることができなかった点がいくつかある。中でも重要と思われるのは、歌唱の発展についての見方と楽器論である。これについては稿をあらためて論じることとしたい。

引用文献および注

- 1) C. Heydebrand. (Hrsg.). *Vom Lehrplan der Freien Waldorfschule*. Stuttgart 1983 S. 57f によれば 1982年における各国の学校数は下のとおりである。

<ヨーロッパ>

西ドイツ(78) イギリス(16) ノルウェー(11)
ベルギー(7) オランダ(46) オーストリア(5)
デンマーク(12) イタリア(2) スウェーデン(11)
フィンランド(4) フランス(8) スイス(24)

<ヨーロッパ以外>

アルゼンチン(2) カナダ(2) 南ア連邦(4)
オーストラリア(8) コロンビア(1) ウルグアイ(1)
ブラジル(2) ニュージーランド(4)

- アメリカ合衆国(2) チリ(1) ペルー(1)
- 2) ペーター・ブリュッゲ著 子安美知子他訳「シュタイナーの学校・銀行・病院・農場」学陽書房、1986 118頁 原題“*Die Anthroposophen*”.
 - 3) R. Steiner, *Theosophie*. Dornach, 1978. S. 21.
 - 4) 第一ヴァルドルフ学校は1919年設立と同時に一年順次学年をつみ上げていく方式をとった。1923年には一学年から四学年までの生徒が在籍したのである。
 - 5) シュタイナーは7才頃における歯牙交代(Zahnwechsel)と14才頃における性的成熟(Geschlechtsreife)を肉体に顕現する発達上の節目と考えたがその間にある9才の時期も、主観の芽ばえと共に外界への懐疑が生じる重要な発達の転換期であると見なしている。
 - 6) R. Steiner, *Aus der Akasha-Chronik*. Dornach 1973 宇宙の生成史および人間の起源を述べた1904年から1908年にいたる著作である。
 - 7) R. Steiner, *Theosophie* Dornach 1978 人間認識の方法。更に高次の認識に至る修業について記されている。1904年の著書。
 - 8) R. Steiner, *Das Tonerlebnis im Menschen*. (以下 *Das Tonerlebnis* と略す) Dornach, 1981 S. 123ff.
 - 9) *ebenda*, S. 124.
 - 10) *ebenda*, S. 125.
 - 11) *ebenda*, S. 136.
 - 12) *ebenda*, S. 143.
 - 13) R. Steiner, *Erziehungskunst. Methodisch-Didaktisches*. Dornach 1974 S. 10.
 - 14) R. Steiner, *Das Tonerlebnis* S. 130f.
 - 15) vgl, R. Steiner. *Theosophie*.
 - 16) R. Steiner, *Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst*. Dornach 1978 S. 58.
 - 17) R. Steiner. *Das Tonerlebnis* S. 121. usw.
「私は音を聞きます。とか私は耳でメロディーを聞きます。などというのは全くの偽りです。音や、メロディーやハーモニーは本来全人間によって体験するのです。」シュタイナーは厳然たる調子でこのように述べている。
 - 18) *ebenda*, S. 122.
 - 19) *ebenda*, S. 138.
 - 20) *ebenda*, S. 139.
 - 21) *ebenda*, S. 139.
 - 22) R. Steiner. *Erziehungskunst. Methodisch-Didaktisches*, S. 44.
 - 23) R. Steiner, *Das Tonerlebnis* S. 139.
 - 24) R. Steiner, *Theosophie*. S. 33ff.
 - 25) R. Steiner, *Das Tonerlebnis* S. 131f.
 - 26) *ebenda*, S. 127.
 - 27) *ebenda*, S. 133f, S. 141ff.
 - 28) *ebenda*, S. 144f.
 - 29) *ebenda*, S. 144.
 - 30) *ebenda*, S. 130.